

東京都福祉サービス第三者評価 評価結果

評価結果基本情報

評価年度	令和6年度
サービス名称	障害児多機能型事業所（児童発達支援事業、放課後等デイサービス）
法人名称	社会福祉法人げんき
事業所名称	ちびっこタイム品川
評価機関名称	公益社団法人 東京社会福祉士会

コメント

評価は社会福祉士の資格を有する3名で行った。利用者調査では、利用児家族向けに第三者評価の意義や目的を説明したプリントと調査票を配布し、アンケート方式で回答を得た。訪問調査では、管理者から聞き取りを行うとともに、法人や事業所の理念、事業方針、課題、サービス提供の状況などを確認した。また、訪問調査当日に、事業所及び利用児の活動の様子を見学し、事業所の実情理解に努めた。

- (内容)
- I 事業者の理念・方針、期待する職員像
 - II 全体の評価講評
 - III 事業者が特に力を入れている取り組み
 - IV 利用者調査結果
 - V 組織マネジメント項目（カテゴリー1～5、7、8）
 - VI サービス提供のプロセス項目

I 事業者の理念・方針、期待する職員像

1	理念・方針（関連 カテゴリー 1 リーダーシップと意思決定）
	事業者が大切にしている考え（事業者の理念・ビジョン・使命など） 1）すべての人がその人らしく生きていくことができるよう、それぞれの違いを認め合い、お互いに尊重し合える社会を育てていく。2）地域社会における障がいのある人への理解を深め、ともに暮らし、ともに生きる社会の実現を目指す。3）障がいのある人の内なる力を信じ、その人の強みに目を向けた支援を目指す。4）子どもたちにとって安心できる場所をつくる。
2	期待する職員像（関連 カテゴリー 5 職員と組織の能力向上）
	（1）職員に求めている人材像や役割 ・ 援助者としての自覚を持ち、利用者の気持ちや立場に立った支援を心がける。・ 援助者としての専門性を磨き、日々積み重ねからの学びを心がけ、常に自己成長に努める。・ お互いを認め合い、チームワークを大切にする。・ それぞれの得意を生かし、生産性をあげる。
	（2）職員に期待すること（職員に持って欲しい使命感） ・ 子どもたちの成長過程において大切な時間を共に過ごす責任があることを意識すること。・ 自分の支援がエゴになってないか振り返ること。・ 子どもの思いを汲み取ろうとする姿勢、自分が子どもたちにどう思われているか客観的な視点を忘れないこと。・ 生活年齢、発達年齢、特性、性格など広い視野で子どもたちを見て、長期的な視点で必要なことを考えること。・ 職員自身も楽しく仕事をする。

II 全体の評価講評

全体の評価講評

特に良いと思う点

1	新たな管理者は、「もっと子どもたちのために」と職員の協働体制作りを強化した。チームワークは深まり、事業所はさらに強みを増した 今年度、理事を務める職員の跡を継ぎ、新たな管理者が誕生した。管理者は心理職として現場で長く療育に関わり、この仕事の尊さと難しさを痛感している。幼児から学齢までの一貫した質の高い支援を提供したいと、児童発達支援と放課後デイサービスの協働体制強化の必然性を感じ、会議の合同化や情報の共有を進めた結果、チームワークは深まり職員集団は信じあい助け合えるまとまりとなった。もっと子どもたちのために、と心から願う管理者の姿勢は子どもに保護者に職員に届き、温かな空気が職場全体を包む。職員・利用者調査の満足度は驚くほど高い。
2	個々のニーズに寄り添ったきめ細やかな対応と、専門知識と経験に基づいた支援の提供により、保護者から信頼のおける存在となっている 太田ステージ評価をもとに、丁寧にアセスメントを行い、子どもの特性や発達段階を見極めており、個々のニーズに寄り添ったきめ細やかな対応と、専門知識と経験に基づいた支援を実践している。家庭との連携を大切にしながら、保護者との定期的な面談や日々の連絡帳を通じ、子どもの成長や課題を共有している。子どもの将来を見据え、先輩保護者との懇談会を設けたり、勉強会も企画したりと保護者の目線に立ち、家庭を丸ごとサポートしている。アンケート結果から、子どもが楽しく通っていることや職員に信頼をおき、感謝していることが読み取れる。
3	職員と保護者の負担軽減を目標にICT化を進め、連絡帳アプリの導入により双方のコミュニケーションツールとして画期的な成果を得ている 前回第三者評価の改善事項「紙媒体からデジタル化へ」を受けて、職員と保護者の負担軽減を目標にICT化の推進に尽力してきた。中でも顕著な成果がルクミー（連絡帳アプリ）の導入である。保護者と職員間の容易な日々の連絡、子どもの様子を写真やコメントで活き活きと伝え合うなど豊かなコミュニケーションツールとなった。職員調査では、子どもの様子が伝えやすい、連絡が取りやすい、子どもに向き合える時間が多かった等の声が大半を占めた。また父親の参加が増えたという。更なるツールの活用で双方のコミュニケーションの進展が楽しみである。

さらなる改善が望まれる点

1	キャリアパス制度を作り評価と報酬に結び付けている。制度の総合的理解を深め、個人別育成計画の更なる活用を促進されたい 法人は、研修計画で職員の階層を分類した上で、達成目標と研修を体系的に構築し、キャリアパス規程では職位と職務を整理した上で評価の尺度を明示する。職員面談を通して評価を行い、報酬への連動も始まった。職員は自分がどの水準にあるかを自覚し、管理者との面談を通して自己研鑽への意欲や気づきを得る。職員調査でも研修と人材育成について高い評価を得た。さらに、職員の個別研修計画をキャリアパス表と紐づけて作成したことで、法人・事業所・個人の共有が進みステップアップの道筋が見える化した。制度の総合的理解と活用促進を進められたい。
2	事業所を利用する子どもたちが青年期・成人期になっても、安心して利用できるサービスの提供を検討されたい 法人は、「地域社会のすべての人と歩む」として中長期計画を策定し、今後の方向性と達成目標、年度ごとの工程表を明らかにしている。来年度も計画に沿って新規グループホームを開設予定である。しかし、事業所を利用する子どもたちには、法人の展開する現在の成人期サービスでは対応できないことも窺われる。幼少期からちびっこに通い、ちびっことともに歩んできた親からは、成人期に安心して通える質の高い生活介護事業への期待の声も聞かれる。「ライフステージに寄り添い」将来不安を払拭できる事業の展開に期待したい。
3	児発から放デイへの一貫した支援や業務標準化等からも書式の統一が望ましい。報酬改定に伴う書式見直しの今、併せて統一化を推進されたい 児発と放デイの事業を同一建物で運営し、今年度から合同職員会議を毎月開催する等、情報の共有化や連携強化に取り組む。其々が支援に使う種々の文書は、書式が同じもの・類似するもの・異なるものと様々である。児発から放デイへの一貫した支援を行う上でも、業務の標準化や効率化においても可能な範囲で書式の統一を図ることが望ましい。報酬改定に伴い5領域を意識した書式見直しをしている今、併せて統一化を推進されたい。また、これまで必要な都度、マニュアルを作成してきたが、形骸化しているマニュアルの整理及び管理表の作成等を期待したい。

III 事業者が特に力を入れている取り組み

1	★ 発達段階に応じた療育支援に取り組むしくみを確立し、的確な課題分析に力を入れている 子どもの発達段階に応じた療育支援に職員一人ひとりが使命感を持ち、少人数定員を活かしてじっくり丁寧に取り組んでいる。保護者との会話や連絡帳でのやりとり、「個人カード」「家庭生活表」「アセスメント表」等を基に子どもの生活や心身の状況を詳細に把握している。加えて、子どもの様子、日々の振返りや個別記録、毎月の担当者会議、半年毎の個別支援計画書作成・モニタリング・評価、心理職による定期的なアセスメントや個別指導報告等々から子どもの成長経過を追う。このようなしくみと実践、記録を根拠とした的確な課題分析に力を入れている。
関連評価項目(定められた手順に従ってアセスメントを行い、子どもの課題を個別のサービス場面ごとに明示している)	
2	★ 関係機関との連携により、個々に応じた包括的な支援が提供できるよう取り組んでいる 保育園、幼稚園、相談支援事業所、小学校の支援級や特別支援学校、児童発達支援センター、医療機関など様々な関係機関と積極的に関係を持つことを心がけている。見学に行くことや来てもらうことで、専門的ケアの情報共有や必要に応じて関係者会議への参加、書類での情報提供を行い、連携強化を図り、一人ひとりの発達に応じた包括的な支援を提供するように取り組んでいる。また、子どもや家庭の状況により、他施設の方が合っていると判断した際は繋ぐこともしている。必要があれば、相談支援専門員と共に家庭訪問し、家庭状況の把握に努めている。
関連評価項目(個別の支援計画に基づいて子ども一人ひとりの発達の状態に応じた支援を行っている)	
3	★ 音楽療法やアート、ダンスなど外部講師を招いて多様な経験の機会を設けている 音楽療法、アート、ダンス、学習サポートの外部講師を招いて、多様な経験を積んでいく機会を設けており、専門性を持った講師による指導を受けることで、より一層子どもの可能性が広がるよう取り組んでいる。プログラム内容は、児発と放デイではやり方を変え、通所する子どもに合わせてその都度、職員と講師で事前に内容や進め方を入念に打ち合わせている。同じプログラムでも個々の状況に応じて楽しめるよう調整することにより、一人ひとりに合った楽しみ方を味わうことができている。楽しみながら、感受性や創造性を育んでいくことにも繋がっている。
関連評価項目(子どもの主体性を尊重し、施設での生活が楽しく快適になるような取り組みを行っている)	

IV 利用者調査結果

■児童発達支援

調査概要

調査対象： 調査時点での登録者22名の利用児家族を対象に調査を実施し、17名から回答を得ることができた。利用児の年齢は2歳から6歳、男女比はほぼ4：1、平均利用期間は2年5月であった。
調査方法： アンケート方式 アンケート調査票と一緒に第三者評価の目的や意義を記載したプリントを作成し、事業所を通じて家族へ手渡していただいた。回収は、家族から評価機関への直接郵送をお願いした。

利用者総数	22人
利用者家族総数（世帯）	22世帯
アンケートや聞き取りを行った人数	22人
有効回答者数	17人
回答者割合（％）	77.3%

総括

総合的な感想としては、「大変満足」は15名(88.2%)、「満足」が2名(11.8%)で回答者全員が満足と回答した。全体的な感想では、「大変熱心に子ども目線で取り組んでくれる」「大変思いやりがあって大変良い場所になっている」「優しく相談しやすい」「愛情をもって接してくれるので安心している」「雰囲気柔らかい」「しっかり療育して下さり頼りにしている」「とても手厚く見てくれる」「安心して頼っている」「居心地がよく楽しめる空間を提供してくれる」等々、多くの満足の声寄せられた。また、「難しいと思うが、保育時間がもう少し長いとありがたい」との意見があった。個別の質問では、16設問全てで80%以上が「はい」と回答し、うち9問は全員が「はい」と回答している。各項目の自由意見が少なかったものの満足度の高さが読み取れる。

利用者調査結果

1. 事業所に通うことが、子どもの身体の機能や健康の維持・促進の役に立っているか							
はい	17人	どちらともいえない	0人	いいえ	0人	無回答・非該当	0人
全員が「はい」と回答した。自由意見は、なかった。							
2. 事業所での活動は、子どもが興味や関心を持てるものになっているか							
はい	17人	どちらともいえない	0人	いいえ	0人	無回答・非該当	0人
全員が「はい」と回答した。自由意見では、「様々な活動を通して楽しんでいる様子が写真などで見ることができる」「週2回利用しているが、他の曜日でも『ちびっこ』に行きたがるくらい楽しみにしている」との声が聞かれた。							
3. 事業所に通うことが、子どもの情緒面での発達（感情のコントロールを身につける等）の役に立っているか							
はい	17人	どちらともいえない	0人	いいえ	0人	無回答・非該当	0人
全員が「はい」と回答した。自由意見では、「指示に従ったり、我慢したり、約束を守れるようになってきた」との声が聞かれた。							
4. 事業所に通うことで、子どもに社会性（人と人との関わり合いやルール等）が身についているか							
はい	14人	どちらともいえない	3人	いいえ	0人	無回答・非該当	0人
「はい」が82.4%で、「どちらともいえない」は17.6%、「いいえ」と「無回答」はなかった。自由意見では、「適切な距離で友達と接したり、ルールを守れるようになってきた」との意見や、「利用しはじめたばかりなので、これから身についていくことを期待している」との意見があった。							
5. 子どもの様子や支援内容（体調変化時の対応含む）について、事業所と情報共有できているか							
はい	15人	どちらともいえない	1人	いいえ	0人	無回答・非該当	1人
「はい」が88.2%で、「どちらともいえない」は5.9%、「いいえ」はなく、「無回答」が5.9%だった。自由意見は、なかった。							
6. 家族に対する精神的なサポート（子育てに関する悩み相談や進路相談、家族間交流の機会の提供等）は役に立っているか							
はい	15人	どちらともいえない	2人	いいえ	0人	無回答・非該当	0人
「はい」が88.2%で、「どちらともいえない」は11.8%、「いいえ」と「無回答」はなかった。自由意見は、「ルクミー(連絡帳アプリ)で沢山子育てのグチを書いているが、丁寧に返していただきアドバイスをもらっている」「連絡帳で相談すると、サポートの仕方など細かく教えていただいている」との声が聞かれた。							
7. 事業所内の清掃、整理整頓は行き届いているか							
はい	17人	どちらともいえない	0人	いいえ	0人	無回答・非該当	0人
全員が「はい」と回答した。自由意見では、「活動中の写真を見てもきれいに整理されていると思う」「(建物)古さを感じる」との意見があった。							
8. 職員の接遇・態度は適切か							
はい	17人	どちらともいえない	0人	いいえ	0人	無回答・非該当	0人

全員が「はい」と回答した。自由意見では、「子どものことをよく見て明るく声かけをしていただいていると思う」との声が聞かれた。							
9. 病気やけがをした際の職員の対応は信頼できるか							
はい	15人	どちらともいえない	0人	いいえ	0人	無回答・非該当	2人
「はい」が88.2%で、「どちらともいえない」と「いいえ」はなく、「無回答」が11.8%だった。自由意見は、「そのようなことがまだないので分からない」との意見が複数あった。							
10. 子ども同士のトラブルに関する対応は信頼できるか							
はい	14人	どちらともいえない	0人	いいえ	0人	無回答・非該当	3人
「はい」が82.4%で、「どちらともいえない」と「いいえ」はなく、「無回答」が17.6%だった。自由意見は、「まだそういう場面がないので分からない」との意見が複数あった。							
11. 子どもの気持ちを尊重した対応がされているか							
はい	17人	どちらともいえない	0人	いいえ	0人	無回答・非該当	0人
全員が「はい」と回答した。自由意見では、「子どもがかんしゃくを起こしても、何が嫌だったのかなと丁寧に寄り添ってくれる」との声が聞かれた。							
12. 子どものプライバシーは守られているか							
はい	17人	どちらともいえない	0人	いいえ	0人	無回答・非該当	0人
全員が「はい」と回答した。自由意見は、なかった。							
13. 個別の計画作成時に、子どもや家族の状況や要望を聞かれているか							
はい	17人	どちらともいえない	0人	いいえ	0人	無回答・非該当	0人
全員が「はい」と回答した。自由意見では、「面談で細かくお話しして、計画に取り入れてくださっている」との意見があった。							
14. サービス内容や計画に関する職員の説明はわかりやすいか							
はい	17人	どちらともいえない	0人	いいえ	0人	無回答・非該当	0人
全員が「はい」と回答した。自由意見は、なかった。							
15. 利用者の不満や要望は対応されているか							
はい	16人	どちらともいえない	1人	いいえ	0人	無回答・非該当	0人
「はい」が94.1%で、「どちらともいえない」は5.9%、「いいえ」と「無回答」はなかった。自由意見は、なかった。							
16. 外部の苦情窓口（行政や第三者委員等）にも相談できることを伝えられているか							
はい	15人	どちらともいえない	1人	いいえ	1人	無回答・非該当	0人
「はい」が88.2%で、「どちらともいえない」と「いいえ」は各5.9%、「無回答」はなかった。自由意見は、なかった。							

■放課後等デイ

調査概要

調査対象：調査時点での登録者40名の利用児を対象にアンケート調査を実施した。24名から回答を得られたが、回答の多くは、利用児の家族が本人の気持ちを推察して回答していた。なお、利用児の男女比はほぼ2：1、平均利用期間は6年0月であった。 調査方法：アンケート方式 アンケート調査票と一緒に第三者評価の目的や意義を記載したプリントを作成し、事業所を通じて家族へ手渡していただいた。回収は、家族から評価機関への直接郵送をお願いした。

利用者総数	40人
アンケートや聞き取りを行った人数	40人
有効回答者数	24人
回答者割合（％）	60.0%

総括

総合的な感想としては、「よい」は21名(87.5%)、「ややよい」が2名(8.3%)、「よくない」が1名(4.2%)で、ほぼ全員が満足と回答した。全体的な感想では、「親身に見てくれる」「とても楽しそうで大好きと言っている」「物理的にも精神的にも安心できる場所になっている」「困った時に相談に乗ってくれ、嬉しいことや成長が見られた時は一緒に嬉しさを共有してくれる」「これからも楽しいことを一杯したい」「良い、悪いをはっきりとしてくれる」「保護者会で他の親と顔を合わせる機会がある」「発達状況に応じた支援や助言がある」等、感謝の声が多く聞かれた。また、「勉強も指導してほしい」「学校への迎えがあると良い」「利用日をもう少し増やしてほしい」等の要望も聞かれた。個別の質問では、13問中11問の設問で、80%以上が「はい」と回答し、満足度の高さが読み取れる。
--

利用者調査結果

1. 事業所での活動は楽しく、興味の持てるものとなっているか
--

はい	22人	どちらともいえない	1人	いいえ	1人	無回答・非該当	0人
「はい」が91.7%で、「どちらともいえない」と「いいえ」は各4.2%、「無回答」はなかった。自由意見では、「金曜日のアートやクッキング、夏休みの水遊びをととても楽しみにしている」「友達と共同で活動できる場ができた」「クッキングの経験を家でも実践する等、知らなかった子どもの一面が見られた」等の声が聞かれた。一方で、「児発から放デイに変わり、活動内容が学習になったことで『やりたくない』と言うようになった」との意見があった。							
2. 事業所での仲間との関わりは楽しいか							
はい	19人	どちらともいえない	3人	いいえ	1人	無回答・非該当	1人
「はい」が79.2%で、「どちらともいえない」が12.5%、「いいえ」と「無回答」は各4.2%だった。自由意見では、「声がうるさく感じるお友達もいるけれど、我慢できるようになってきたので、皆と楽しく遊べて嬉しい」「帰りのバスで『バイバイ』とお友達に手を振っている姿を見た」との意見や、「泣き声が苦手なため、お友達と自ら積極的に遊ぶのは難しい」との意見もあった。							
3. 職員は、話し相手や、相談相手になってくれるか							
はい	22人	どちらともいえない	1人	いいえ	0人	無回答・非該当	1人
「はい」が91.7%で、「どちらともいえない」は4.2%、「いいえ」はなく、「無回答」が4.2%だった。自由意見では、「いつも始まる前に約束を確認してくれる」「困ったときは助けてくれる」「相談できるようになってきた」「本人の様子(表情、しぐさ)を良く読み取ってくれる」「いつも表情良く楽しそう」との意見があった。また、「発語がないため、わからない」や、親の相談にのってもらい助かっているとの声も複数聞かれた。							
4. 事業所内の清掃、整理整頓は行き届いているか							
はい	22人	どちらともいえない	1人	いいえ	0人	無回答・非該当	1人
「はい」が91.7%で、「どちらともいえない」は4.2%、「いいえ」はなく、「無回答」が4.2%だった。自由意見では、「とても広くてきれいで、物を置く場所も決まっていって分かりやすい」「いつ訪れてもとても整理整頓されていると思う」との意見があった。							
5. 職員の接遇・態度は適切か							
はい	24人	どちらともいえない	0人	いいえ	0人	無回答・非該当	0人
全員が「はい」と回答した。自由意見では、「いつも動きやすそうな服装をされている」「分かる言葉で伝えてくれるので安心してゐる」との意見があった。							
6. 病気やけがをした際の職員の対応は信頼できるか							
はい	23人	どちらともいえない	0人	いいえ	0人	無回答・非該当	1人
「はい」が95.8%で、「どちらともいえない」と「いいえ」はなく、「無回答」が4.2%だった。自由意見では、「どのようなことがあったかを親(保護者)に真摯に説明して下さる」「転んでケガをした時、すぐに病院へ連れて行ってくれた」「横になる場所を作ってくれたり、水分をとる時間を作ってくれたりするので、いつも元気に活動できる」との声が聞かれた。							
7. 子ども同士のトラブルに関する対応は信頼できるか							
はい	20人	どちらともいえない	1人	いいえ	1人	無回答・非該当	2人
「はい」が83.3%で、「どちらともいえない」と「いいえ」が各4.2%、「無回答」は8.3%だった。自由意見では、「信頼して任せられる先生方である」「後から理由を聞いてくれたり、どうすれば良かったのかを一緒に考えてくれる」との意見が聞かれた。							
8. 子どもの気持ちを尊重した対応がされているか							
はい	23人	どちらともいえない	0人	いいえ	1人	無回答・非該当	0人
「はい」が95.8%で、「どちらともいえない」と「無回答」はなく、「いいえ」が4.2%だった。自由意見では、「皆さん愛情をもって接して下さっていることが良く伝わっている」「悪いことを止めるのが難しい場合は、気をそらすなど柔軟に対応してくれる」「いつも落ち着いて約束を思い出させてくれるのでほっとする」との意見があった。							
9. 子どものプライバシーは守られているか							
はい	22人	どちらともいえない	0人	いいえ	0人	無回答・非該当	2人
「はい」が91.7%で、「どちらともいえない」と「いいえ」はなく、「無回答」が8.3%だった。自由意見では、「(プライバシーを)守ってくれる」との意見があった。							
10. 個別の計画作成時に、子どもや家族の状況や要望を聞かれているか							
はい	22人	どちらともいえない	0人	いいえ	0人	無回答・非該当	2人
「はい」が91.7%で、「どちらともいえない」と「いいえ」はなく、「無回答」が8.3%だった。自由意見では、「とても丁寧に聞いてもらっている」「計画は母と先生が話して決めている」「いつも『困っていることない?』『どうになりたい?』など聞いてくれる」「学校での取り組みと合わせて、同時にサポートして下さっている」との意見があった。							
11. サービス内容や計画に関する職員の説明はわかりやすいか							
はい	23人	どちらともいえない	0人	いいえ	0人	無回答・非該当	1人
「はい」が95.8%で、「どちらともいえない」と「いいえ」はなく、「無回答」が4.2%だった。自由意見では、「書面や口頭での説明をきっちりしてくれる」「子どもの特性や気持ちを大事にしながら接してくれているのが、言葉や対応から伝わってくる」「毎回、始まる前に約束として分かりやすい言葉で伝えてくれるので、頑張ろうと思う」との声が聞かれた。							
12. 子どもの不満や要望は対応されているか							
はい	22人	どちらともいえない	0人	いいえ	1人	無回答・非該当	1人
「はい」が91.7%で、「どちらともいえない」はなく、「いいえ」と「無回答」が各4.2%だった。自由意見は、「泣いたり怒ったり強い口調で伝えてしまっても、落ち着いてから言葉で話すように時間をくれる」「爪切りのことで悩んでいた時に、解決方法を一緒に考えてくださった」との声が聞かれた。							

13. 外部の苦情窓口（行政や第三者委員等）にも相談できることを伝えられているか

はい	16人	どちらともいえない	2人	いいえ	1人	無回答・非該当	5人
----	-----	-----------	----	-----	----	---------	----

「はい」が66.7%で、「どちらともいえない」が8.3%、「いいえ」が4.2%、「無回答」は20.8%だった。自由意見は、『『ちびっこタイム品川』に見学に来てくれたり、自宅に訪問してくれたりする相談支援センターの方もいるので大丈夫です』との意見があった。

V 組織マネジメント項目（カテゴリー1～5、7、8）

※実施あり：○、実施なし：×、非該当：-

カテゴリー1 リーダーシップと意思決定			
サブカテゴリー1 事業所が目指していることの実現に向けて一丸となっている			
	評価項目1	事業所が目指していること（理念・ビジョン、基本方針など）を周知している	実施状況
	標準項目1	事業所が目指していること（理念・ビジョン、基本方針など）について、職員の理解が深まるような取り組みを行っている	○
	標準項目2	事業所が目指していること（理念・ビジョン、基本方針など）について、利用者本人や家族等の理解が深まるような取り組みを行っている	○
	評価項目2	経営層（運営管理者含む）は自らの役割と責任を職員に対して表明し、事業所をリードしている	実施状況
	標準項目1	経営層は、事業所が目指していること（理念・ビジョン、基本方針など）の実現に向けて、自らの役割と責任を職員に伝えている	○
	標準項目2	経営層は、事業所が目指していること（理念・ビジョン、基本方針など）の実現に向けて、自らの役割と責任に基づいて職員が取り組むべき方向性を提示し、リーダーシップを発揮している	○
	評価項目3	重要な案件について、経営層（運営管理者含む）は実情を踏まえて意思決定し、その内容を関係者に周知している	実施状況
	標準項目1	重要な案件の検討や決定の手順があらかじめ決まっている	○
	標準項目2	重要な意思決定に関し、その内容と決定経緯について職員に周知している	○
	標準項目3	利用者等に対し、重要な案件に関する決定事項について、必要に応じてその内容と決定経緯を伝えている	○
講評			
理念研修を通して、発足から現在に至る心と実践を職員に伝えている 「地域社会のすべての人とともに歩む」を法人理念とし、平成7年から29年間に亘り障害児者支援の活動を続けている。障害のある子どもを持つ親のグループが始めた活動は、児童発達支援（以下「児発」という）と放課後デイサービス（以下「放デイ」という）という2つの事業に育ち、任意団体は、子どもから大人までを対象とする多様なサービスを提供する法人へと成長を遂げた。発足当時を知る職員が中心となって行う理念研修では、新人と管理者を重点的な対象として法人が培い紡いできた心と実践を職員に伝える。			
重要事項説明書に法人の沿革・特色をのせ、契約時に必ず保護者に伝えている 重要事項説明書に法人の沿革と特色を簡潔に記載している。契約時に管理者が記載内容を丁寧に読み上げ、制度が何もない時代に活動を始めた熱意と苦労を伝える。小さな運動が様々な人たちと結びつき育ち、今の活動に繋がっていることを、これから利用を開始する保護者にもわかってほしいと管理者は語る。法人の理念とともに先輩保護者たちの足跡を共有することが、事業所と保護者が子どもたちの支援に向けて理解しあい信頼を築きあうために基本となる。中長期計画は理念・基本方針・目指す職員像が絡みあい、次世代へのメッセージとなる。			
管理者は、法人全体の方向性やビジョンを事業所経営に落とし込んでいきたいとしている 法人全体に係る重要な意思決定は理事会・管理者会議で行い、各会議の議事録は常勤職員が見ることができるクラウド上に収める。特に重要な案件は、事業所職員全員が集まる会議で管理者からコンパクトに説明する。事業所全体に関わる重要事項について話し合う時間を十分に確保できているとはいえない現状ではあるが、朝の打ち合わせや支援に関わる会議、リスクマネジメント会議などの場を活用し議論を進めている。今年度就任した管理者は、法人が担うマネジメント等経営に関することを十分に理解し、事業所経営に落とし込むことが課題と認識している。			

※実施あり：○、実施なし：×、非該当：-

カテゴリー2 事業所を取り巻く環境の把握・活用及び計画の策定と実行			
サブカテゴリー1 事業所を取り巻く環境について情報を把握・検討し、課題を抽出している			
	評価項目1	事業所を取り巻く環境について情報を把握・検討し、課題を抽出している	実施状況
	標準項目1	利用者アンケートなど、事業所側からの働きかけにより利用者の意向について情報を収集し、ニーズを把握している	○
	標準項目2	事業所運営に対する職員の意向を把握・検討している	○
	標準項目3	地域の福祉の現状について情報を収集し、ニーズを把握している	○
	標準項目4	福祉事業全体の動向（行政や業界などの動き）について情報を収集し、課題やニーズを把握している	○
	標準項目5	事業所の経営状況を把握・検討している	○
	標準項目6	把握したニーズ等や検討内容を踏まえ、事業所として対応すべき課題を抽出している	○
サブカテゴリー2 実践的な計画策定に取り組んでいる			
	評価項目1	事業所が目指していること（理念・ビジョン、基本方針など）の実現に向けた中・長期計画及び単年度計画を策定している	実施状況
	標準項目1	課題をふまえ、事業所が目指していること（理念・ビジョン、基本方針など）の実現に向けた中・長期計画を策定している	○
	標準項目2	中・長期計画をふまえた単年度計画を策定している	○
	標準項目3	策定している計画に合わせた予算編成を行っている	○
	評価項目2	着実な計画の実行に取り組んでいる	実施状況
	標準項目1	事業所が目指していること（理念・ビジョン、基本方針など）の実現に向けた、計画の推進方法（体制、職員の役割や活動内容など）、目指す目標、達成度合いを測る指標を明示している	○
	標準項目2	計画推進にあたり、進捗状況を確認し（半期・月単位など）、必要に応じて見直しをしながら取り組んでいる	○
講評			
新事業所設立や報酬改定など必要な情報は、区や他事業所、独自ルートで入手している			
法人は品川区や区内の多様な事業所と密接な連携体制がある。今後の児童発達支援センターや区児童相談所の開設など多様な情報について、関係機関との対話、自立支援協議会、利用者の支援等を通してキャッチする。今年度の障害福祉サービスにおける報酬改定についてもいち早く情報を入手し、減収を回避するための書式の変更にもいち早く取り組んだ。国や都から迅速で丁寧な説明はなく、改定内容の分析には時間・労力は大きな負担だったと推察される。個別支援計画書の変更については、既に実行していたものであり変更は少なかった。			
中長期と実行の計画を1枚のシートにまとめ、現状と課題、将来のあり様まで理解できる			
法人は、中長期計画と実行計画を1枚のシートに記載する。経営・支援・地域社会・福祉人材の4つの観点から、強味・現状課題・将来あるべき姿をまとめ、ビジョン達成の方法を毎年度の取り組みに繋げる。中長期計画実行のための計画も年度ごと具体的に作成し、評価も行うシートとなっている。記載された言葉の一つひとつに経営層の考える法人のあるべき姿が映し出され、計画をまとめる際に経営層が議論を重ねた様子が窺われる。支援経験の長い事業所長が管理者会議のメンバーになったことで、法人の方向性と事業所の支援が一つの線で結ばれるだろう。			
事業計画と事業報告は対をなし、年度途中の進捗状況がわかりやすい			
事業所の単年度計画には、目的・重点目標・支援内容などとともに、利用目標・会議・年間のイベント等の計画・施設点検・危機管理・研修など多岐に及ぶ項目を簡潔に記載する。クラウド上の計画書に実績を都度記載し、毎月の会議でタイムリーに行い進捗状況を全員が把握する。各種点検や提出物など事務手続き、研修や避難訓練などの備忘録的役割も果たす。出席状況や会議の日程や概要に加え、支援、防災訓練、ヒヤリハット・事故報告は振り返りも記載し、事業所全体の1年間の活動状況が一目で理解できる。計画と報告が一對となっている。			

カテゴリー3 経営における社会的責任			
サブカテゴリー1 社会人・福祉サービス事業者として守るべきことを明確にし、その達成に取り組んでいる			
	評価項目1	社会人・福祉サービスに従事する者として守るべき法・規範・倫理などを周知し、遵守されるよう取り組んでいる	実施状況
	標準項目1	全職員に対して、社会人・福祉サービスに従事する者として守るべき法・規範・倫理（個人の尊厳を含む）などを周知し、理解が深まるように取り組んでいる	○
	標準項目2	全職員に対して、守るべき法・規範・倫理（個人の尊厳を含む）などが遵守されるように取り組み、定期的に確認している。	○
サブカテゴリー2 利用者の権利擁護のために、組織的な取り組みを行っている			
	評価項目1	利用者の意向（意見・要望・苦情）を多様な方法で把握し、迅速に対応する体制を整えている	実施状況
	標準項目1	苦情解決制度を利用できることや事業者以外の相談先を遠慮なく利用できることを、利用者に伝えている	○
	標準項目2	利用者の意向（意見・要望・苦情）に対し、組織的に速やかに対応する仕組みがある	○
	評価項目2	虐待に対し組織的な防止対策と対応をしている	実施状況
	標準項目1	利用者の気持ちを傷つけるような職員の言動、虐待が行われることのないよう、職員が相互に日常の言動を振り返り、組織的に防止対策を徹底している	○
	標準項目2	虐待を受けている疑いのある利用者の情報を得たときや、虐待の事実を把握した際には、組織として関係機関と連携しながら対応する体制を整えている	○
サブカテゴリー3 地域の福祉に役立つ取り組みを行っている			
	評価項目1	透明性を高め、地域との関係づくりに向けて取り組んでいる	実施状況
	標準項目1	透明性を高めるために、事業所の活動内容を開示するなど開かれた組織となるよう取り組んでいる	○
	標準項目2	ボランティア、実習生及び見学・体験する小・中学生などの受け入れ体制を整備している	○
	評価項目2	地域の福祉ニーズにもとづき、地域貢献の取り組みをしている	実施状況
	標準項目1	地域の福祉ニーズにもとづき、事業所の機能や専門性をいかした地域貢献の取り組みをしている	○
	標準項目2	事業所が地域の一員としての役割を果たすため、地域関係機関のネットワーク（事業者連絡会、施設長会など）に参画している	○
	標準項目3	地域ネットワーク内での共通課題について、協働できる体制を整えて、取り組んでいる	○
講評			
倫理規程を読み合わせ権利擁護の視点を意識化し、支援に繋がるよう取り組んでいる 法人は職員倫理規程、利用者の権利擁護規程、就業規則、懲戒手続き規程、法令順守規程など職員の倫理とコンプライアンスに係る規程を準備している。倫理規程では、「利用者の人としての尊厳を大切にし、（中略）あらゆる理由において差別しません」等7項目を掲げる。権利擁護規程では、個人の尊厳の尊重・自己決定権の尊重、プライバシーの保護など、利用者の権利擁護のために為すべき施設と職員の義務を列挙する。職員会議では、倫理規程や権利擁護規程の読み合わせを行い、職員が権利擁護の視点を意識化した支援を行うよう取り組んでいる。			
権利擁護・虐待防止・身体拘束防止に向け、法人と事業所は連携して取り組んでいる 虐待防止、身体拘束防止には法人をあげて積極的に取り組んでいる。法人横断的な虐待防止委員会を年3回以上開催、事業所では法人の会議を受け同様の委員会を毎月1回行う。会議のレジュメには事前に虐待・リスクの項目を設け、チェックリストを利用した研修や振り返り、ヒヤリハットと虐待などについて話し合う時間を設けている。毎日の連絡会でも虐待や身体拘束について気になることがなかったか、子どもたちの表情やしぐさなどのメッセージを見落とししていないか丁寧に一日の支援を振り返っている。			
支援を通じて構築した関係機関との信頼が、地域の温かなつながりを育てている 事業所は品川区内でも有数の歴史ある事業所で知名度も高く、区役所や地域の関係機関とも会議等を通じて協働できる関係にある。また、幼稚園や保育園とは個別支援のことで訪問し合うなど、互いに互いの支援を理解し尊重しあいながら子どもに最善の支援が提供できるよう情報を共有している。具体的支援関係から生まれた連携は強く、1本の線が面となり連携の輪は他事業所にも広がりがつつある。さらに、心理学専攻の大学院生の実習を毎年受け入れ、土曜日には保護者が集い語り合う。他、町内会に場所の提供をするなど、開かれた活動は一步一步進んでいる。			

カテゴリー4 リスクマネジメント			
サブカテゴリー1 リスクマネジメントに計画的に取り組んでいる			
評価項目1	事業所としてリスクマネジメントに取り組んでいる		実施状況
標準項目1	事業所が目指していることの実現を阻害する恐れのあるリスク（事故、感染症、侵入、災害、経営環境の変化など）を洗い出し、どのリスクに対策を講じるかについて優先順位をつけている		○
標準項目2	優先順位の高さに応じて、リスクに対し必要な対策をとっている		○
標準項目3	災害や深刻な事故等に遭遇した場合に備え、事業継続計画（BCP）を策定している		○
標準項目4	リスクに対する必要な対策や事業継続計画について、職員、利用者、関係機関などに周知し、理解して対応できるように取り組んでいる		○
標準項目5	事故、感染症、侵入、災害などが発生したときは、要因及び対応を分析し、再発防止と対策の見直しに取り組んでいる		○
サブカテゴリー2 事業所の情報管理を適切に行い活用できるようにしている			
評価項目1	事業所の情報管理を適切に行い活用できるようにしている		実施状況
標準項目1	情報の収集、利用、保管、廃棄について規程・ルールを定め、職員（実習生やボランティアを含む）が理解し遵守するための取り組みを行っている		○
標準項目2	収集した情報は、必要な人が必要ときに活用できるように整理・管理している		○
標準項目3	情報の重要性や機密性を踏まえ、アクセス権限を設定するほか、情報漏えい防止のための対策をとっている		○
標準項目4	事業所で扱っている個人情報については、「個人情報保護法」の趣旨を踏まえ、利用目的の明示及び開示請求への対応を含む規程・体制を整備している		○
講評			
リスクマネジメント規程に基づき、多様なマニュアルやチェックシート等を作っている 法人は、規程に基づきリスクマネジメント委員会を年3回開催、事業所では毎月開催する。自然災害、火災、事故、事件、苦情、感染症、虐待などをリスクと捉え、緊急管理マニュアルとして、対応方法についてまとめている。マニュアルはフロー図を示し、起こった事態によって職員が何をすべきかが具体的に示されており見やすい。他にも、非常災害対策計画、不審者侵入防止対策チェックポイント、個人情報漏洩防止チェックリスト、など多様なマニュアル等を準備する。一方、ありすぎて全体が見通せないと認識しており、重複等の見直しを予定している。			
ヒヤリハット報告を分析し、事故の起こる危険性を少なくする取り組みを進められたい 事業所ではヒヤリハット報告や日々の振り返りからリスクを取り上げ、毎回のリスクマネジメント委員会で話し合う。昨年度、放デイでのヒヤリハット報告件数が少なかったため、今年度は積極的に取り上げるようにしている。ヒヤリハット報告事案への対応については、都度話し合っており、一定の解決策は出ている。さらに、的確な予防対策によって実効性を向上させるため、今後、報告内容を場所や時間、人、遊具別などで分類した上で、どこに危機が潜んでいるかを客観的・数値的に明らかにし、対策を講じることが望まれる。			
情報管理を適切に行うため、ICT化を促進している 法人は情報管理を重要な課題と捉え、ICT化を進めている。記録ソフトや連絡帳ソフトの活用に留まらず、人事管理ソフト、グループウェア機能を導入し情報共有と管理、ドキュメント管理など情報管理の徹底と事務の削減、人的ミスの根絶に向かおうとしている。すべての職員がその必要性和全体像を概ね理解し、納得のもとで利用してほしいと考え、法人では今年度ICT委員会を立ち上げ、職員がICTの重要性や適切な使い方と言ったITリテラシーを高めるための活動を行う予定である。新たな取り組みに期待したい。個人情報は規程に沿って管理している。			

カテゴリー5 職員と組織の能力向上			
サブカテゴリー1 事業所が目指している経営・サービスを実現する人材の確保・育成・定着に取り組んでいる			
	評価項目1	事業所が目指していることの実現に必要な人材構成にしている	実施状況
	標準項目1	事業所が求める人材の確保ができるよう工夫している	○
	標準項目2	事業所が求める人材、事業所の状況を踏まえ、育成や将来の人材構成を見据えた異動や配置に取り組んでいる	○
	評価項目2	事業所の求める人材像に基づき人材育成計画を策定している	実施状況
	標準項目1	事業所が求める職責または職務内容に応じた長期的な展望（キャリアパス）が職員に分かりやすく周知されている	○
	標準項目2	事業所が求める職責または職務内容に応じた長期的な展望（キャリアパス）と連動した事業所の人材育成計画を策定している	○
	評価項目3	事業所の求める人材像を踏まえた職員の育成に取り組んでいる	実施状況
	標準項目1	勤務形態に関わらず、職員にさまざまな方法で研修等を実施している	○
	標準項目2	職員一人ひとりの意向や経験等に基づき、個人別の育成（研修）計画を策定している	○
	標準項目3	職員一人ひとりの育成の成果を確認し、個人別の育成（研修）計画へ反映している	○
	標準項目4	指導を担当する職員に対して、自らの役割を理解してより良い指導ができるよう組織的に支援を行っている	○
	評価項目4	職員の定着に向け、職員の意欲向上に取り組んでいる	実施状況
	標準項目1	事業所の特性を踏まえ、職員の育成・評価と処遇（賃金・昇進・昇格等）・称賛などを連動させている	○
	標準項目2	就業状況（勤務時間や休暇取得、職場環境・健康・ストレスなど）を把握し、安心して働き続けられる職場づくりに取り組んでいる	○
	標準項目3	職員の意識を把握し、意欲と働きがいの向上に取り組んでいる	○
	標準項目4	職員間の良好な人間関係構築のための取り組みを行っている	○
サブカテゴリー2 組織力の向上に取り組んでいる			
	評価項目1	組織力の向上に向け、組織としての学びとチームワークの促進に取り組んでいる	実施状況
	標準項目1	職員一人ひとりが学んだ研修内容を、レポートや発表等を通じて共有化している	○
	標準項目2	職員一人ひとりの日頃の気づきや工夫について、互いに話し合い、サービスの質の向上や業務改善に活かす仕組みを設けている	○
	標準項目3	目標達成や課題解決に向けて、チームでの活動が効果的に進むよう取り組んでいる	○
講評			
期待する職員像に沿った職員体制を実現するため、先を見据えた行動をしている			
事業所は期待する職員像として、「専門性を磨き日々の積み重ねから学びを心がけ、常に自己成長に努める」、「お互いを認め合いチームワークを大切にする」など4点を挙げる。急な退職に伴う職員不足の経験から積極的に心理大学院生の実習を受け入れたところ、今年度は3名の実習生が卒業と同時に就職した。また、前管理者の異動後には長く現場をまとめていた職員が昇進したことで、これまでのチームワークを維持し、かつ、支援の質を落とすことなく新体制をスタートすることができた。先を見据え、大切にしたいものを守るための取り組みが実を結んだ。			
研修計画・評価制度の導入・資格取得支援などを通して人材育成に取り組んでいる			
法人は、キャリアパスに則した優れた研修体制を作っている。職位を5段階に括り、それぞれに必要な研修を組織的OFF-JTと専門的OFF-JTとして分類列举する。さらに、実施時期と法人内で実施する研修の内容も具体的に箇条書きし職員研修計画としてまとめ、年度内には個人別研修計画の活用促進に取り組む。今年度は従来から実施している職員個別面談を充実させ、報酬と結び付ける評価制度を導入した。キャリアパス規程では、評価のしくみを明らかにするとともに、社会福祉士等の資格取得費用の補助や研修への参加支援を定めている。			
尊敬しあえる職場の人間関係は、上質な支援を生み出す原動力となっている			
職員調査の「職員の定着に向け、職員の意欲向上に取り組んでいる」「組織力の向上に向け、組織としての学びとチームワークの促進に取り組んでいる」という項目に全員がはいと答え、事業所の良い点として「良好な人間関係が構築されチームワークがとれている」「人間関係が良好、何でも教えてくれる」などチームワークの良さを挙げる意見が多くみられた。事業所内の2つの事業の垣根をなくした会議の開催も功を奏した。新人職員にとって尊敬する先輩職員とともに温かな環境で働くことは、何物にも代えがたい学びであり上質な支援の源ともなる。			

カテゴリ7 事業所の重要課題に対する組織的な活動				
サブカテゴリ1 事業所の重要課題に対して、目標設定・取り組み・結果の検証・次期の事業活動等への反映を行っている				
	評価項目1	事業所の理念・基本方針の実現を図る上での重要課題について、前年度具体的な目標を設定して取り組み、結果を検証して、今年度以降の改善につなげている（その1）		
	前年度の重要課題に対する組織的な活動（評価機関によるまとめ）	事業所では、過去に法人内の異動や退職などで常勤・非常勤合わせて3分の1ほどの職員が入れ替わり、補充と定着が順調に進まず苦慮することがあった。福祉業界の人材不足が大きな要因ではあるが、退職理由として連携不足や経験不足、業務量の多さを上げる職員もいた。そのため、「計画的な人材確保と育成」を重点課題として、次の4つの目標を掲げそれに伴う活動を実施した。 ① 専門人材を確保するための道を作る ② 業務量の適正化、省力化を図る ③ チームワークの向上を図る ④ 一人ひとりの職員にあった育成を考え研修を構成するとともに、意欲向上に向け評価制度を導入する 各目標の具体的活動として、以下を実施した ① 心理専門大学院生の実習を通年で受け入れる ② 紙ベースの書類を減らし、ICT化を進める ③ 児童発達支援と放課後等デイサービスの職員全体で話し合う機会を設ける ④ キャリアパスと連動した研修及び評価制度を導入する		
		評価	目標の設定と取り組み	具体的な目標を設定し、その達成に向けて取り組みを行った
			取り組みの検証	目標達成に向けた取り組みについて、検証を行った
			検証結果の反映	次期の事業活動や事業計画へ、検証結果を反映させた
【講評】 「計画的な人材確保と育成」を重点課題として、取り組みを行った。それぞれの結果は以下のとおりである。 ① 心理系大学院の実習生を卒業後新入職員として採用できた。通年で事業所に通い、支援を通して学び研究を深められた職場環境と良好な人間関係が就職に繋がった大きな要因と思われる。1年間かけた採用活動が実を結んだ ② 連絡帳と記録をICT化した。連絡帳は手軽に書きやすく写真を容易に送れることもあり職員・保護者双方にとって満足する結果となった。今年度、さらに改善を図るとしている。また、記録ソフトの導入は、転記が減ったことで概ね好評である。未使用の機能もあるため、今年度もさらに使い込む予定である ③ 全体で顔を合わせて報連相を行うことで職員間の意思疎通が円滑になった。職場での会話が増え事業を超え互いに助け合う関わりが進んだ。今年度はさらに職員会議として毎月時間を設けることとした ④ 法人が策定し、今年度周知・実行する予定である 大きな課題に対しPDCAサイクルに基づいて取り組みを行い、さらなる検討が必要な②については今年度以降の課題とした。良い職場環境は人材確保と人材育成に繋がる。次年度に向け取り組みを続けられたい。				
	評価項目2	事業所の理念・基本方針の実現を図る上での重要課題について、前年度具体的な目標を設定して取り組み、結果を検証して、今年度以降の改善につなげている（その2）		
	前年度の重要課題に対する組織的な活動（評価機関によるまとめ）	法人は、子どもから大人まで一貫して利用できる多様な事業を展開する。しかし、児発を終了後、支援の継続が必要な時でも放課後デイを継続利用しないこともある。サービス提供時間が限られることや卒業後の支援を保護者に伝えきれていないこと、他事業の内容や将来像が見えないこと、などによる保護者の不安も要因として考えられる。生活介護や中高生グループ対象の放課後デイの開始も将来的には検討したいが、現時点では「継続した支援の利点を生かし、将来の支援像が見える化し保護者の不安を減らす」ことを重点課題として、次の3つの目標を掲げそれに伴う活動を実施した。 ① 児童発達支援と放課後デイサービス職員の協働体制の強化 ② 法人が行っている児童・大人向け事業を紹介し、将来を考える機会の提供 ③ 学齢期の生活・教育・支援に関する情報提供 各目標の具体的活動として、以下を実施した ① 毎日の会議や検討会を開催し、情報共有の機会を作った ② グループホーム職員から事業の様子、情報提供などの機会をもった ③ 現在特別支援学校に通う保護者を招き、幼児の保護者対象に懇談会の機会を設けた		
		評価	目標の設定と取り組み	具体的な目標を設定し、その達成に向けて取り組みを行った
			取り組みの検証	目標達成に向けた取り組みについて、検証を行った
			検証結果の反映	次期の事業活動や事業計画へ、検証結果を反映させた
【講評】 「継続した支援の利点を生かし、将来の支援像が見える化し保護者の不安を減らす」ことを重点課題として、取り組みを行った。それぞれの結果は以下のとおりである。 ① 児発と放課後デイ職員の情報共有・協働体制が進みチームワークがよくなった。双方の支援内容の検証ができ、児発で				

の支援を放課後デイに繋げるための共通認識ができつつある。今年度も引き続き取り組んでいる

② 子どもたちの将来について情報を得たことで、一定の安心感をもつことができ保護者からは好評だった。引き続き継続することとした

③ 目の前のことである特別支援学校の話は「とても参考になった」と好評だった。話題提供を担った保護者からもいい機会を持てた等の感想があった。保護者同士の情報交換が進むことで、先を見据えたサービスの選択にも繋がると評価している。今後も継続する予定である

大きな課題に対しPDCAサイクルに基づいて取り組みを行い、子どもたちの将来を見据え法人として何をすべきかを考え続けている。現状でできることに取り組むとともに、新たなサービスの開始なども見据えながら現在の課題に取り組んでいる。

VI サービス提供のプロセス項目（カテゴリー 6）

カテゴリー 6 サービス提供のプロセス			
サブカテゴリー1 サービス情報の提供			
	評価項目1	子どもや保護者等に対してサービスの情報を提供している	実施状況
	標準項目1	子どもや保護者が入手できる媒体で、事業所の情報を提供している	☐
	標準項目2	子どもや保護者の特性を考慮し、提供する情報の表記や内容をわかりやすいものになっている	☐
	標準項目3	事業所の情報を、行政や関係機関等に提供している	☐
	標準項目4	子どもや保護者の問い合わせや見学の要望があった場合には、個別の状況に応じて対応している	☐
講評			
事業所の思いと決意をリーフレットやホームページでシンプルに温かく伝えている			
障害児通所支援施設「ちびっこタイム品川」は、少人数定員で子どもと保護者にじっくり関わり丁寧な支援をすることをリーフレットに明記し、楽しく子育てする手伝いをしたいと事業所の思いと決意を伝えている。落ちつきがない、友達と遊べない、おもちゃに関心を示さない等子育てで感じている心配事を気軽に話してほしいと優しく語りかける。また、ホームページにも事業概要や利用対象、利用の流れ、プログラム、交通手段、地図等を分かりやすくシンプルに載せる。落ち着いた色づかいやイラスト、程よい余白が読み手に温かみと安心感を伝えている。			
職員や保護者のアンケート結果の公表、区のガイドブックへの掲載等情報提供をしている			
厚労省のガイドラインに沿った職員と保護者のアンケート結果を毎年、児発・放デイ別にホームページに掲載している。現場職員の声や保護者が語る自由意見が載せられ、事業所のサービスの実態や取り組む姿勢を伝える有効なツールと言える。また、区の「子ども発達支援ガイドブック」への情報掲載、相談支援事業所と連携して空き状況を毎月提供する。更に自立支援協議会や事業所連絡会等の地域関係機関の会議等に出席し、事業所の現況や療育や福祉への思いを伝えている。加えて、園や学校、関係機関を訪問する等、より密度の濃い情報提供に努めている。			
問合せや見学時には子どもにとって最善の療育を親とともに考え、見通しある対応を行う			
我が子の発達を心配する保護者が最初に関わる施設として親に敬意をもって接している。問合せには管理者が対応し、家族の思いや要望を聴き、空き状況や利用開始時期等を伝え、利用児の状況や希望児の特性等に配慮し見学日を設定する。見学時には所属園・学校、療育・医療機関、診断名、手帳の有無、利用日や送迎の希望等を「見学記録」に記入してもらい、職員は食事や排泄、言葉等の状態を確認し追記する。希望児に朝の会や遊びに参加してもらうこともある。子どもの最善の療育を保護者と考え、状況により適切な機関や社会資源等の情報を提供している。			

サブカテゴリ2 サービスの開始・終了時の対応			
	評価項目1	サービスの開始にあたり子どもや保護者に説明し、同意を得ている	実施状況
	標準項目1	サービスの開始にあたり、基本的ルール、重要事項等を子どもや保護者の状況に応じて説明している	○
	標準項目2	サービス内容や利用者負担金等について、子どもや保護者の同意を得るようにしている	○
	標準項目3	サービスに関する説明の際に、子どもや保護者の意向を確認し、記録化している	○
	評価項目2	サービスの開始及び終了の際に、環境変化に対応できるよう支援を行っている	実施状況
	標準項目1	サービス開始時に、子どもの支援に必要な個別事情や要望を決められた書式に記録し、把握している	○
	標準項目2	利用開始直後には、子どもの不安やストレスが軽減されるように支援を行っている	○
	標準項目3	サービス利用前の生活をふまえた支援を行っている	○
	標準項目4	サービスの終了時には、子どもや保護者の不安を軽減し、支援の継続性に配慮した支援を行っている	○
講評			
利用開始時には重要事項説明書や利用説明書、通所決定通知書で丁寧に説明している			
利用にあたり子どもの特性やレベル等に配慮したクラス編成をしていること、区が発行する受給者証が必要なこと等を伝えている。利用契約時には契約書、重要事項説明書、利用説明書を配布し、法人の沿革・特色、事業方針、活動・行事、個別支援計画、利用料金、欠席・振替、持ち物や注意事項、緊急時対応等を説明し契約を取り交わす。加えて、「通所決定通知書」を基に通所開始日、契約日数、送迎の有無等を確認している。基本的に1年毎の自動更新となるが、児発から放デイへ利用が切り替わる際は、改めて放デイの説明をして新規契約を交わしている。			
家族からの聞き取りや文書で、子どもの療育支援に重要な情報を詳細に把握している			
新規利用時には、家族から提出される「個人カード」「家庭生活表」「成育歴」で、子どもの基本情報、保護者の希望、子を取り巻く関係機関を、また「アセスメント表」や家族との面談等から子どもの生活や心身の状況を詳しく把握している。災害時緊急用の薬を預かる場合は「与薬依頼書」を、発作等がある場合は「()に関する同意書」の提出を求め事前に対応を確認する。利用開始直後の子どもの不安を和らげるために、保護者に事業所の写真を見せる・通所時のリュックを決める等を助言し、子どもと直接会っている職員が送迎車に添乗する等工夫している。			
子どものライフステージに沿って、次への移行がスムーズに進むよう支援している			
事業所は児発と放デイの事業を行い原則、幼児から高校生まで一貫したサービスを提供する。移行がスムーズに進むよう、児発では保護者会に卒業した保護者を招き小学校の情報提供や交流を、放デイでは就労支援や共同生活援助の職員を招き施設紹介をしている。また、児発では一緒に就学先を考え学校訪問をしたり就学支援シートを作成し、放デイへ移行の際は放デイ職員との情報共有を図る。転居等で終了する場合は、支援が継続して行えるよう状況報告書を提出する等、子どものライフステージに沿った最善の療育を常に考え、適切な受入先を探し繋いでいる。			

サブカテゴリー3 個別状況に応じた計画策定・記録			
	評価項目1	定められた手順に従ってアセスメントを行い、子どもの課題を個別のサービス場面ごとに明示している	実施状況
	標準項目1	子どもの心身状況や生活状況等を、組織が定めた統一した様式によって記録し、把握している	☐
	標準項目2	子ども一人ひとりのニーズや課題を明示する手続きを定め、記録している	☐
	標準項目3	アセスメントの定期的見直しの時期と手順を定めている	☐
	評価項目2	子どもや保護者の希望と関係者の意見を取り入れた個別の支援計画を作成している	実施状況
	標準項目1	計画は、子どもや保護者の希望を尊重して作成、見直しをしている	☐
	標準項目2	計画を子どもや保護者にわかりやすく説明し、同意を得ている	☐
	標準項目3	計画は、見直しの時期・手順等の基準を定めたうえで、必要に応じて見直している	☐
	標準項目4	計画を緊急に変更する場合のしくみを整備している	☐
	評価項目3	子どもに関する記録が行われ、管理体制を確立している	実施状況
	標準項目1	子ども一人ひとりに関する必要な情報を記載するしくみがある	☐
	標準項目2	計画に沿った具体的な支援内容と、その結果子どもの状態がどのように推移したのかについて具体的に記録している	☐
	評価項目4	子どもの状況等に関する情報を職員間で共有化している	実施状況
	標準項目1	計画の内容や個人の記録を、支援を担当する職員すべてが共有し、活用している	☐
	標準項目2	申し送り・引継ぎ等により、子どもに変化があった場合の情報を職員間で共有化している	☐
講評			
子どもの今を詳細に把握し、発達段階に応じた課題を分析し支援方法を検討している 問合せや見学時の聞き取りをはじめ、「見学記録」「個人カード」「家庭生活表」「アセスメント表」等を活用し、子どもの生活や心身の状況、発達課題を的確に把握するよう努めている。また、日々の振返りや個別記録、連絡帳、面談、毎月の担当者会議、半年毎の個別支援計画書作成・モニタリング・評価をしている。加えて、心理職による定期的なアセスメントや個別指導報告等から子どもの今を詳細に把握し、発達段階に応じた課題を分析し支援方法を検討している。更に毎年、書面で子ども及び子を取り巻く環境の変化等の情報を収集し更新している。			
保護者の希望や子どもの様子を計画に反映し、定期的に進捗確認と見直しをしている 新規利用は契約後1か月以内、更新では計画終了後2週間以内を目安に、半年単位の個別支援計画書を作成する。保護者面談や連絡帳等のやり取り、子どもの様子を踏まえて総合的な支援方針や長・短期目標、利用時間数、本人支援として健康・運動・認知等5領域別に目標・支援内容・留意事項等を、更に家族支援・移行支援・地域生活支援を盛り込む。児発では認知領域について心理個別支援計画として別途作成し、放デイでは心理士による個別指導を計画に落とし込んでいる。毎月の担当者会議、作成3ヶ月後のモニタリング会議で進捗確認、見直しをしている。			
日々の個別支援記録を場面毎に記録し、振り返りを行い職員間で共有している 日々の子どもの状態、支援方法とその結果について、共有ソフトを使ってPCに記録する。記録の際は、個別支援計画の目標や支援方法を確認し、子どもの状態がどう変化したかを具体的に記している。また、児発・放デイ別に毎日振り返りを行い、登所から降所までの場面ごと課題別の状況、職員の動き、気になる子どもの行動分析、ヒヤリハット・事故報告、改善点、申送り等を記録し職員間で共有している。放デイでは、5領域に沿った日案作成と振り返りができる書式を思案し試行を始めており、今後は児発での取り入れも検討したいとしている。			

サブカテゴリー4 サービスの実施			
	評価項目1	個別の支援計画に基づいて子ども一人ひとりの発達の状態に応じた支援を行っている	実施状況
	標準項目1	個別の支援計画に基づいた支援を行っている	○
	標準項目2	子どもの特性に応じて、コミュニケーションのとり方を工夫している	○
	標準項目3	関係機関（教育機関、福祉関係機関、医療機関等）と連携をとって、支援を行っている	○
講評			
支援の重点ポイントを打ち合わせで確認するなど、意識して子どもに関わっている 排泄などの身辺自立、姿勢保持などの身体の使い方、自分の気持ちの伝え方等、個々の障害特性や発達段階、年齢等に応じて作成した個別支援計画をもとに取り組んでいる。通所してくる子どもの個別支援計画の目標の中で、特に重点を置いているポイントを朝の打ち合わせで確認したり、支援を行う場所に目標の抜粋を掲示する等、全職員が意識して関わるよう努めている。ケース記録は、目標に沿って記録することを心がけており、モニタリングに反映している。月1回の担当者会議では、目標に対する進捗状況を話し合い、次の一ヶ月の支援に活かしている。 個々に合ったコミュニケーションの取り方を検討し、統一した関わり方で対応している 写真や絵カードを使用する、「おしまい」「おかたづけ」はマカトンサインを使用する等、言葉で伝えるとともに視覚支援も用いることで理解を促し、子どもに伝わるコミュニケーションを図っている。また、絵や文字カードを壁に貼って一日の予定を伝えることで、見通しを持って過ごせるように工夫している。朝の出席確認では職員の名前も呼び、声の大きさや返事の仕方の手本をさりげなく見せることも取り入れている。振り返りや担当者会議では、心理職を中心に個々に合ったコミュニケーションの取り方を検討し、統一した関わり方で対応している。 関係機関と情報共有を図り、子どもが安心できる生活環境を整えるよう努めている 児発では保護者から訪問をしてほしいと言われることがあるため、了承を得て保育所や幼稚園、併用利用している他療育機関に訪問をしている。見学も積極的に受け入れており、子どもの活動場面を見もらうことで保育園での対応に活かしたケースもある。情報共有を行いながら、子どもにとって安心した生活環境を整えるように努めている。放デイでは、学校お迎え時に申し送り様子伺い、施設内での状況を伝えることもある。また、相談支援専門員が来訪して計画相談のモニタリングをした結果を適宜個別支援計画に反映させている。			
	評価項目2	【食事の支援がある事業所のみ】子どもが食事を楽しめるよう支援を行っている	実施状況
	標準項目1	食事時間が楽しいひとときとなるよう環境を整えている	○
	標準項目2	子どもの状態やペースに合った食事となるよう、必要な支援（見守り、声かけ、食の形態や用具の工夫等）を行っている	○
	標準項目3	子どもが安全に食事をとれるよう取り組みを行っている	○
	標準項目4	食物アレルギーや疾患等については、医師の指示に従い、対応している	○
	標準項目5	食についての関心を深めるための取り組みを行っている	○
	標準項目6	子どもの状況をふまえて家庭での食事について助言を行っている	○
講評			
子どもの好みや過敏に対する理解を深め、食事が楽しい時間になるように取り組んでいる 子ども同士の相性やペース、アレルギーなどに配慮して落ち着いた環境になるように座席を決め、顔写真を置いて子どもに自席を伝えている。子ども2、3人に対し1人の職員が付くようにしているが、自食が難しい子どもには1対1で対応している。食事のペースに課題がある場合は、時計の数字を伝え意識することを促している。以前は、完食や三角食べをすることなどを重視していたこともあったが、一人ひとり美味しいと感じるものは違うことや感覚過敏で食べられないことへの理解を深め、食事が楽しい時間になるように取り組んでいる。 宅配業者や家庭と連携し、お弁当をできるだけ食べられるよう根気よく関わっている 宅配弁当を利用しており、子どもに合わせてカットする、食べたことのない食材は抜くなどの配慮をしている。偏食の子どももいるため、まぜごはんの日を無くし、毎日白米にふりかけをつけるように変更するなど宅配業者と連携を図っている。家族が作ったものしか食べられない子どもは、お弁当を持参し、お弁当箱の中に少しずつ宅配弁当のおかずを入れて慣らしていき、最終的には空のお弁当箱に宅配弁当を移して食べることができるようになった事例もある。食具は持参してもらっているが、子どもに合ったものがある場合は伝え、家庭との協力を図っている。 クッキング活動などの実践的な体験を通して、「食」に関する関心を深めている 放デイでは、週に1回クッキングの活動を取り入れている。自分の食べる量のおやつを器に入れ、牛乳を計量カップで量ってから器に入れたり、自分で食べる量のごはんをお茶碗によそったり、実践的な取り組みをしている。子どもが関心を持つ「食」を通したプログラムを取り入れることで、一人でできる経験につながっている。児発では、さつまいもの皮を剥いたり、アルミホイルに包んだりとできる部分に参加してもらい、焼き芋をして楽しむなどのクッキング体験を年に数回実施している。			

	評価項目3	子ども一人ひとりの状況に応じて生活上に必要な支援を行っている	実施状況
	標準項目1	身の回りのことは自分でできるよう、必要な支援を行っている	○
	標準項目2	基本的な生活習慣や社会生活上のルール等（あいさつ、マナー、交通ルール等）を身につけられるよう支援を行っている	○
	標準項目3	集団活動を取り入れるなど、子どもの心身の発達や社会性が育つよう支援を行っている	○
	標準項目4	一人ひとりの有する能力を活かせるよう個別のプログラムを実施している	○
	標準項目5	送迎は、子どもと保護者等の状況に応じて送迎方法を検討し、行っている	○

講評

交通ルールや基本的な生活習慣が身につくような活動を工夫し取り入れている

散歩など外出する際は、横断歩道の渡り方を伝えたり、信号を意識できるような声掛けをすることで、危険なく渡れるように取り組んでいる。また、施設内で2階に上がる際に、色のカードを使い、赤の時は止まれ、青は進んでもいいというルールで信号と一致させ、室内でも信号を意識できるようなアイディアを出し合い取り組んでいる。放デイでは、染色液で歯の汚れを分かりやすくしてから歯磨きの練習をする、プールに入る前に身体を洗う練習をする、排泄や着脱の練習など、自立に向けた基本的な生活習慣が身につくようなプログラムを多く取り入れている。

アセスメントをもとに子どもの発達段階に合わせて適切な手助けをしている

心理職が多く在籍していることが施設の強みであり、太田ステージ評価をメインに使い、細かくアセスメントをとっている。心理職の評価をもとに、子どもの発達段階に合わせ、適切な手助けとなるように見極めている。また、集団活動を通して、順番を待つ、人の話を聞く、時間に合わせて行動するなどの経験を積んでいき、ルールやマナーが身につくようにしている。児発では、心理職や理学療法士の専門職が作成した専門的支援実施計画に沿って個別訓練を行っている。放デイでは、集団の中で専門職が子どもに付き、個別訓練を行う時間を確保し対応している。

家庭の状況や希望に合わせて、様々な送迎や自主降所ができるように練習している

放デイでは、希望する子どもに対して、自主降所ができるように練習している。自宅前まで送り、子どもがインターホンを押す所を見守ることや、後ろからついていき安全に帰宅できるか見守る、約束事項を一つ一つ確認し、しっかりと復唱させてから降所する、帰宅後に家族から電話をもらうなど、きめ細やかな対応をしている。家族と協力しながら、一人ひとりに合わせた安全な方法で自主降所が可能となるよう、段階的に練習を進めている。児発では、家庭の状況に合わせて保育園に送ることや徒歩で送ることを行っている。

	評価項目4	子どもの健康を維持するための支援を行っている	実施状況
	標準項目1	子どもの健康状態について、保護者や医療機関等から必要な情報を収集している	○
	標準項目2	子どもの状態に応じた健康管理を行い、体調変化に速やかに対応できる体制を整えている	○

講評

連絡帳アプリや視診、引き継ぎにて、子どもの健康状態を把握することに努めている

連絡帳アプリを使って、睡眠時間、食事、排泄、検温など子どもの健康に関わる情報を丁寧に把握している。連絡帳アプリを導入したことにより、通所前に子どもの体調面を確認することができるようになり、通所後の対応がスムーズになった。受入時は、顔色や機嫌は悪くないか、元気はあるかななどの確認を行い、子どもの様子を注意深く把握することに努めている。学校お迎え時も、必要に応じて先生に体調確認をしている。おもちゃや椅子は職員が丁寧に消毒するなど清潔な状態を保つことで、感染症予防対策等に取り組んでいる。

緊急時に備え備品を準備し、子どもの健康についての理解を深めるよう取り組んでいる

送迎車には、救急セットや嘔吐セット、飲み物の購入に使う小銭を常備して、緊急時に備えている。夏場は麦茶を持って送迎に行き、汗をかいている子どもには適宜水分補給を行い、熱中症や脱水の予防に努めている。子どもの変化に気づけるかどうかは職員によって差があり、一人ひとりの子どもについてよく理解することや子どもの健康に関する知識の習得に力を入れている。加えて、救命救急に関する講習を職員全体で受講するなど、職員の能力向上を図っている。また、子どもの健康についての理解を深めるために、てんかん発作などの研修も予定している。

アレルギーやてんかん発作対応について家族との連携を図り、子どもの安全を守っている

宅配弁当はアレルギー食も対応しているため、該当する子どもの食事は保護者と相談しながら進め、重度の場合は座席も離すなど安全面を確保した対応をしている。食事の準備場所には、アレルギー以外にも一人ひとりの食事の配慮事項が書かれた表を用意し、一つずつ確認しながら食事の準備をしている。気になる発疹があった際に、連絡帳アプリで写真を送り様子を伝えたことで、感染症の発見に繋がったこともあった。また、てんかん発作がある子どもについては、事前に主治医からの指示書をもらい、保護者と対応方法を確認し、同意書をとっている。

	評価項目5	子どもの主体性を尊重し、施設での生活が楽しく快適になるような取り組みを行っている	実施状況
	標準項目1	日常生活の支援は子どもの主体性を尊重して行っている	☐
	標準項目2	子どもが安心して活動できるよう、状況に応じて室内の環境を工夫している	☐
	標準項目3	子どもの状況や希望に沿って、多様な体験ができるようにしている	☐
	標準項目4	【放課後等デイサービス】子どもの状況に応じて利用日や利用時間を設定している	☐

講評

子どもに自由な選択の機会をつくり、気持ちや要求を表現できるようにしている

以前は、帰る前の自由時間におもちゃなどを数種類見せて、その中から選んでもらっていた。選択肢を少なくすることで選びやすくなるメリットもあるが、選択肢の中にやりたいものがない可能性もあり、主体性を考え、子どもによって、選択肢を制限せず自由に選べる方法も取り入れている。おもちゃは写真や絵カードを使用して選んだり、絵本を読む際は、じゃんけんで勝った子どもが好きなものを選ぶようにするなど工夫している。「どこに作ろうか」「どれにしようか」等、子どもにたくさん問いかけることで、子どもが要求を表現できる機会を作っている。

障害特性や発達状況に合わせたクラス編成をするなど、落ち着ける空間作りに努めている

児発では障害特性に合わせたクラス編成をして曜日を決めている。放デイでは年齢や発達状況に合わせて曜日を設定し、水曜日は学習支援の日としている。目的を合わせたクラス編成にすることで、同じプログラムに取り組むことや落ち着いた雰囲気づくりができ、子どもの集中力を高めることや他児を意識することにつながっている。室内がワンフロアのため、区切りにくい環境ではあるが、マットでおうちのような物をつくることでカームダウンエリアとするなど、子どもが落ち着ける空間づくりに取り組んでいる。

様々な活動やイベントを取り入れ、年間を通じて多様な経験ができるよう取り組んでいる

手先を使った微細運動、全身を使う粗大運動を取り入れた運動機能訓練、生活訓練等、子どもの発達を促すため、様々な活動がある。また、夏季はプール、12月はクリスマス会など季節に合わせた活動やイベントを取り入れ、年間を通じて幅広い経験ができるよう取り組んでいる。音楽療法では歌やリズムに合わせて体を動かす感覚を楽しみ、オーシャンドラムやウクレレなど色々な楽器を通じて、聴覚や触覚など五感を刺激する体験となっている。ダンスでは音楽に合わせて体を動かし、アートでは表現する楽しさを体験することができている。

	評価項目6	家族との交流・連携を図り支援を行っている	実施状況
	標準項目1	子どものサービス提供時の様子や家庭での普段の様子を家族と情報交換し、支援に活かしている	☐
	標準項目2	家族の意見や要望を活かした支援を行っている	☐
	標準項目3	家族の状況に配慮し、相談対応や支援を行っている	☐
	標準項目4	子どもや家族に合った療育方法等について助言している	☐

講評

連絡帳アプリの導入により、写真も添付でき、円滑で丁寧なやりとりが可能となった

連絡帳では、その日の出来事を記入し写真を添付して様子を伝えている。アプリになったことで通所中に記入を終わらせる必要がなくなり、時間をかけて返信することができるようになった。療育時間を割く必要がなくなったため、職員と保護者にとってプラスに転じている。保護者からの相談の記載があった場合、まずはいつも通りその日の子どもの様子を伝え、あとからゆっくり時間をとり、相談に対する対策法や園での取り組み方、連携方法の提案など丁寧な返信を心がけている。なお、写真は専用サイトで閲覧でき、希望者は購入もできる。

保護者会の中で先輩保護者を招いた懇談会を実施し、保護者の情報交換の場を設けている

保護者会を年に2回開始している。児発を卒園し、他事業所の放デイに通う子どもの保護者に来てもらい、学校の話や放デイの様子を聞かせてもらう機会を設けている。学校や学級、性別など共通の話題があるグループに分けて話す懇談会形式にし、同じ悩み等が話題に上がりやすくするための工夫をしている。就学後について考える良い機会となり、保護者から好評を得ている。また、放デイの保護者にはグループホームの話などを聞く機会を設けている。先輩として呼ばれることを楽しみにしている保護者もあり、保護者同士のつながりの場となっている。

保護者の要望を聞き取る機会を設け、今後に活かすための働きかけを検討している

保護者との連携を大切にしており、毎月スケジュールを配布し、予定や活動の内容、強化課題などをお知らせしている。また、子どもの発達状況だけでなく、家庭の状況によっても柔軟に利用方法を検討することもある。保護者会のあとはアンケートを実施し、感想や取り上げてほしい内容を聞き取り、今後に活かせるよう取り組んでいる。今後は要望にあった父の会の開催やきょうだい児を持つ親の会など、勉強会のようなものを年に数回実施することを検討している。保護者がより積極的に療育に関わるような働きかけを考えている。

	評価項目7	地域との連携のもとに子どもの生活の幅を広げるための取り組みを行っている	実施状況
	標準項目1	地域の情報を収集し、子どもの状況に応じて提供している	○
	標準項目2	必要に応じて、子どもが地域の資源を利用し、多様な体験や交流ができるよう支援を行っている	○
	標準項目3	【児童発達支援センター】 地域全体の在宅障害児や関係機関等を対象に、施設・設備や人材・プログラムを有効に活用した支援を実施している	-

講評

社会資源を活用し、交通ルールや公共施設でのマナーを学ぶ機会を作っている

障害者作品展に出展するために制作活動に取り組んでいる。外出活動として自分たちの作品が実際に展示されている所を見に行く機会を設け、自分の作品を見る喜びを味わうことにつながっている。また、バスに乗ったり、電車に乗って近くの駅に行き、電車の模型を見て帰ってきたりすることなどで、交通ルールや公共交通機関、公共施設でのマナーについて学ぶ機会を作り、安全に外出を楽しめるように働きかけている。さらに、地域の公園に外出して遊具で遊ぶなど、社会資源を活用しながら社会のルールを知る機会になっている。

時代の流れとともに変化する保護者のニーズとマッチした地域交流を検討している

児発では散歩に行った際、どんぐり拾いなど自然と触れ合う機会を大切にしている。手を繋いで歩けるか休憩時にベンチに座っていられるか等、子どもの発達段階や課題を確認する機会にもなっている。以前は近隣の幼稚園や保育園との交流を行っていたが、コロナ禍で中断し、最近はクリスマスプレゼントを送ってもらう程度で、関わりが薄くなっている。現在は、幼稚園や保育園と併用している子どもが多く、以前より交流に対するニーズがなくなっていると感じているため、再開は見送っており、保護者のニーズとマッチした地域交流を検討している。

近隣の人たちとの交流が図られており、更なる認知と交流にむけて取り組んでいる

地域のイベントのチラシをPDFにして連絡帳アプリを使って提供するなど保護者との共有を図っているほか、保護者からも地域の情報を教えてもらっている。また、管理者が地域のお祭りや事業所連絡会に参加し、施設の顔となり、認知してもらうことに取り組んでいる。地域に根ざしている施設のため、雪かきを手伝ってもらったり、夏にすいかをもらったりと近隣の人たちとの交流も図られている。町内会の方に、お祭りの太鼓の練習場所として施設を貸しており、今後は子どもも楽しみながら交流できる機会を作れるようにと考えている。

サブカテゴリー5 プライバシーの保護等個人の尊厳の尊重			
	評価項目1	子どものプライバシー保護を徹底している	実施状況
	標準項目1	子どもに関する情報（事項）を外部とやりとりする必要がある場合には、子どもや保護者の同意を得るようにしている	○
	標準項目2	日常の支援の中で、子どものプライバシーに配慮した支援を行っている	○
	標準項目3	子どもの羞恥心に配慮した支援を行っている	○
	評価項目2	サービスの実施にあたり、子どもの権利を守り、個人の意思を尊重している	実施状況
	標準項目1	日常の支援にあたっては、個人の意思を尊重している（子どもが「ノー」と言える機会を設けている）	○
	標準項目2	子どもと保護者の価値観や生活習慣に配慮した支援を行っている	○
	標準項目3	施設内の子ども間の暴力・いじめ等が行われることのないよう組織的に予防・再発防止を徹底している	○
講評			
個人情報を使用する各場面を「個人情報の取扱いについて」に記し、慎重に取り扱う 事業所は日常の療育活動や事業運営に必要な場面での情報提供、外部への写真・映像も限定的に提供する等個人情報を使用する各場面を「個人情報の取扱いについて」で明文化し、利用契約時には、「個人情報取扱い承諾書」で使用の許可を得ている。加えて、ルクミー（連絡帳アプリ）利用の際の個人情報や写真等のデータの取扱いについて書面で同意を得、写真を使う際は背景に個人情報が映っていないかを慎重に確認している。リーフレットやホームページへの写真掲載はしていない。法人はプライバシーマークを取得し、個人情報の適切な管理を公表している。			
会話をはじめ様々な場面で、常にプライバシーや羞恥心への配慮に努めている 職員同士、保護者や子どもとの会話等をはじめ、常にプライバシーへの配慮に努めている。幼い子ども自分のことが話されることに敏感なため、職員間の情報共有は子どもの目に触れない、耳に入らないよう工夫する等の配慮をしている。着脱の際は男女別室、また放デイではパーテーションで仕切り、トイレ等の介助をする際は同性介助で、児発はオムツ交換をトイレの中で行う等徹底している。恥ずかしいと思う気持ちも温度差があり環境調整だけでは子どもの意識を変えることが難しい場合は、保護者と連携し家庭での支援に繋げている。			
子どもや家族の意思を尊重した関わりができるよう、考えをブラッシュアップしている 職員は、子どもの思いを汲み取っているか、支援者のエゴになっていないか、長期的な視点で必要なことを考えているか等を自問し、職員間で振り返りながら支援に関わる。食事や療育に対する考えも時代とともに変化し、保護者の考えも多様化する中、これまで以上に職員は子どもや家族の意思を大切にしたい関わりができるよう、常に考えをブラッシュアップしていくことを心がけている。子どもの年齢や発達課題により利用曜日を分け、更に子ども同士の関係性から食事の席を分けたり利用日を変更する等調整し、子どもの特性に配慮した対応に努めている。			

サブカテゴリー6 事業所業務の標準化			
	評価項目1	手引書等を整備し、事業所業務の標準化を図るための取り組みをしている	実施状況
	標準項目1	手引書(基準書、手順書、マニュアル)等で、事業所が提供しているサービスの基本事項や手順等を明確にしている	○
	標準項目2	提供しているサービスが定められた基本事項や手順等に沿っているかどうかを定期的に点検・見直しをしている	○
	標準項目3	職員は、わからないことが起きた際や業務点検の手段として、日常的に手引書等を活用している	○
	評価項目2	サービスの向上をめざして、事業所の標準的な業務水準を見直す取り組みをしている	実施状況
	標準項目1	提供しているサービスの基本事項や手順等は改変の時期や見直しの基準が定められている	○
	標準項目2	提供しているサービスの基本事項や手順等の見直しにあたり、職員や子ども・保護者等からの意見や提案を反映するようにしている	○
講評			
様々な場面での取り組みや実践状況を分かりやすく纏め、円滑な情報共有を図っている 一日の業務や活動の流れを記した「日案」を基に毎朝打合せを行い、日々の振り返りでは反省・改善点を記録し、個別支援計画の作成・実施・評価のフェーズを文書化する等職員間の情報共有を徹底している。また、利用者支援をする上で必要項目を網羅した年度事業計画と事業報告は対をなし、月毎の進捗や一年間の計画に対する取り組み状況が容易に把握でき、全体の業務が見渡しやすい。更に、業務を洗出し文書提出時期等をまとめた業務一覧表、月毎に事業所・法人・区／都別の予定を表に纏めた管理マニュアルは誰が何をいつまでに行うのかが明快である。			
報酬改定に伴う個別支援計画書やモニタリング表、報告書等の検討・見直しをしている 毎月開催する児発と放デイ合同職員会議に虐待防止・リスクマネジメントの勉強会を盛り込み、年間計画に基づき良い職場作り、権利擁護や倫理規程の読合せ、各種チェックリストによる自己点検や話し合いをしている。また、緊急連絡体制、災害、事故、事件、苦情、送迎中の緊急時対応マニュアルを整備し、様々な災害や事件を想定した訓練を毎月実施し、職員の役割分担の周知、再確認をしている。報酬改定に伴う個別支援計画書やモニタリング表、報告書等の見直しを行い、今後は形骸化しているマニュアルの整理や既存マニュアルの見直しが必要と考えている。			
保護者や子ども、職員の声を事業運営に反映し、着実なサービスの質の向上に取り組む 一人ひとりの子どもに最善の支援が届くよう常に提供しているサービスの質の向上に目を向け、保護者や子ども、職員の声を事業運営に反映している。厚労省のガイドラインに沿った職員や保護者のアンケート、事業所独自の保護者アンケート、3年に一度受審する福祉サービス第三者評価における職員調査、利用者調査等の各結果は何れも高い評価であるが、事業所は改善や課題に取り組む上で貴重な情報として真摯に受け止め対策を講じている。日々の活動から年単位のものまで計画・実施・評価そして改善策を講じて反映するPDCAサイクルを徹底している。			

